

第一次世界大戦前香港上海銀行ハンブルク支店

大阪経済大学 蕭 文 嫻

本報告は 1890 年から第一次世界大戦が勃発するまでのアジアとドイツとの貿易金融を、アジア貿易金融分野の主要なプレーヤーである英系国際銀行のハンブルク支店の業務に即して具体的に考察するものである。

ドイツの対アジア貿易金融は、1889 年の独亜銀行の上海設立を契機に、新しい段階に入る。その設立を受けて英系国際銀行の香港上海銀行やチャータード銀行が相次いでハンブルクに支店や、代理店を開設した。1913 年に至っても独亜銀行の為替業務は英系国際銀行と比較して規模がかなり限られているものであり、ドイツとアジア間の貿易金融は第一次世界大戦前において主に英系国際銀行によって行われたように思われる。

この期間の香港上海銀行ハンブルク支店を見ると、預金・貸付業務の規模は小さく、フランスを除くヨーロッパ大陸とアジア諸国間の貿易金融業務を行うことが主である。ドイツのアジア諸国からの輸入に関する貿易決済がほとんどロンドンで行われることから、同行ハンブルク支店の業務はドイツからアジアに対する輸出金融を行うことが中心となり、その資金は主にロンドン支店によって提供される。周知の通り欧米など諸外国からアジアへの輸出にかかわる金融業務は、1870 年代以降の長期にわたる銀価下落により、1870 年代末からアジア諸国の通貨建の荷為替手形とポンド建利付手形が平行に利用される状況が見られる。1890 年代になると、ポンド建利付手形の利用が主流となった。さらに、20 世紀初頭以降、輸出金融にはまた一つの転換が見られ、ロンドン引受信用という新しい融資方法が急速に拡大した。こうしたロンドンにおける輸出金融の変化は、ドイツの東洋向け輸出金融にも大きな変化をもたらした。香港上海銀行ハンブルク支店の輸出金融業務のドイツの対アジア輸出における割合は 1900 年の 22.9%から 1905 年の 25.2%に増加したが、1905 年から 1910 年には 21.4%に減少した。さらに、輸出業務の内容を見ると、1895 年から 1910 年に至るまでの利付手形利用の継続的な減少も見られた。同行はこうした輸出金融の現状をどのように認識し、どのような対策を考えたであろうか。また 1905 年にハンブルク支店を開設したチャータード銀行ハンブルク支店に関しても同様の変動が見られたかどうか。こうしたことも考察を加えることが必要であろう。

こうしてドイツの対アジア輸出金融分野における競争のあり方を通じてこの時期のロンドン、ハンブルク、アジアの諸金融市場がどのように結びついていたのかを分析し、ロンドン金融市場が世界経済に果たした役割を考えてみる。